

「おせっかい という愛の遺伝子」 山本孝弘 氏

260613

ご講演をいただいた山本先生の文章を紹介します。

母は人前に出るのが苦手で控えめな戦中生まれの女性である。それ故、積極的に進み出て他人に親切にすることは無いのだが、僕が子どもの頃、母のさりげない親切をよく目にした。

買い物に行った時に倒れた自転車を見つけるとよく起こしていた。ゴミ集積場で袋が破れているものがあると作業員が回収しやすいように家からゴミ袋を持ってきて綺麗にしていることもあった。

あの頃家では地元の地方新聞を購読していたが、時々郵便受けに入れ忘れられることがあった。その度に母は販売店に電話をした。慌ててバイクで届けに来て平謝りする配達員に対し、母は配達員以上に頭を下げていた。

小学生だったある夜、ドラゴンズが劇的な逆転勝ちをした。翌朝僕は新聞を楽しみにしていたのだがまた届けられておらず、母にすぐ電話をしてくれるように頼んだ。だがその日の母は適当に頷くだけでなかなか電話をしてくれない。学校に行く時間が来てしまうので僕が再度強くお願いした時に母からこう言われた。

「今日は我慢しない？ こんなどしゃ降りの日にもまた届けに来てもらうのは申し訳ないよ」

そういう考え方があることを知り僕は驚いた。僕は小学生でありながら「お金を払っているこちらが偉い」と信じ込んでいた。損得抜きに相手を思いやる母の気持ちに従い、僕はその日の新聞を読むのを諦めた。だが学校が終わり家に帰ると新聞があった。僕がかawaiiそうだと思った母は販売店まで新聞をもらいに行ったそうだ。母は運転免許を持っていない。大雨の中、傘を差して行ってくれたのだった。

(中略) 僕も愛のあるおせっかいで優しい世の中を作る貢献をしようと思う。年が明けると80歳になる僕の母は相変わらずおせっかいを焼いている。僕の体にはその母から受け継がれた血が流れている。